



矢島 渚男 選

雪合戦雪の中から雪の玉

【評】雪降る中での雪合戦を描いて見事。どこから玉が飛んで来るかわからない。単純にして秀逸。闘争心も雪遊びやサッカーにとどめたい。プーチンの笑顔も憎しき冬である

東京都 野上 卓

【評】世界を混乱と困窮に追い込んでいる男。「笑顔も憎し」に同感する人が多いだろう。まさに「冬ざれ」。枯野静か昔の恋が隠れおり

清瀬市 神崎 幸子

【評】「昔」が自分の過去か、万葉時代の恋なのか、分りにくい曖昧さが面白い。「真蘆刈る大野川原の水隠りに恋ひ来し妹が紐解く我は」。万葉集巻十一にはこうした若者の素朴な恋が満ちている

鴨一羽撃たず狩猟免許の失効す

葛城市 二上 三六

アメ横の客を見に行く師走かな

横浜市 岡 まゆみ

冬晴や棺の男晴れ男

千葉市 中村 重雄

枯野行く貌なき者とすれ違ふ

姫路市 難波 佳代

再びのヒロシマあるか冬銀河

浜松市 宮田 久常

雪晴や飛脚には今も蠟燭屋

吹田市 前田 尚夫

文献院戒名燦と漱石忌

東京都 尾崎 永治

宇多喜代子 選

雑踏の一人ひとりの師走かな

藤沢市 原島 吉光

【評】誰もが忙しそうにしている十二月。それぞれがそれぞれの用を抱えて忙しげに歩いている。十二月ならではの光景

志木市 谷村 康志

【評】長く使っているうちに癖に使い癖がつき、使いやすくなっている。何かと癖の出番の多い年末、この癖はますます手になじんでくる。山下の小春の風に押されつつ

東大和市 神山 文字

【評】登山とはいえないような山のぼり。小春日和の心地よい風の中を下りてくる。まことに気持ちのいい風がうしろから吹いてくる。まるで誰かに押されているようだ。思はざる風に瞬く冬日かな

東京都 山内 健治

吐くよりも吸う息多し冬マラソン

福岡市 高山 国光

一つ割り二人で分けて寒卵

川越市 益子さとし

裸木を透かし立山迫り来る

富山市 吉野 恭子

パン種をよく働いて四日かな

神戸市 吉野 勝子

中空に唸る風きく寒さかな

東京都 杉中 元敏

じりじりと老いの確かな年用意

東京都 櫻 正好

正木ゆう子 選

手師の仕種で羽織るシヨールかな

白井市 毘舎利愛子

【評】ふわりと布を被せ、すつと取ると、中から燗が……。そんなふつにふわりと羽織る。防寒のためだけにはないシヨールの華やきを感じられ羽織るたびに思い出しそうな句口笛に旅する心冬の星

川越市 横山由紀子

【評】そういえば、最近あまり口笛を聞かない。私事だが、父や兄は機嫌の良いときによく吹いていた。旅する心。そうだったのかもしれない。冬將軍来駐屯の地は將軍野

秋田市 進藤 利文

【評】將軍野という地名は実際に秋田市にあって、坂上田村麻呂に由来し、今は自衛隊駐屯地だとか。珍しい内容で、しかもとても寒そうだ。日溜りは陽光の果て雫の玉

北本市 萩原 行博

行き過ぎて終の花そつと白

草加市 入江 幸子

落ちてゐる片手袋の声すなり

下妻市 神郡 貢

ポインセチア読み聞かしたき英語

さいたま市 薄井 逸走

煤逃げのごとくに逝きてしまひけり

東京都 吉村 恵子

声を出すための音読冬籠

宝塚市 広田 祝世

板前のみせて大根の桂割き

東京都 田中 靖人

小澤 實 選

初日の出八十億の地球人

松江市 倉林 高次

【評】地球人、いつか八十億にも増えてしまっていたか。この人口そのものも、飢えなどを心配させるものだ。しかし、新しい年の新しい日の出に、全員を幸福を祈りたいもの。再配のヘッドライトに雪激し

新潟県 冬木 陽介

【評】再配は再配達の略語か。現場ではこの語が使われているのかも。慌ただしい感じもある。雪降る中で配達の仕事はたいへんである。霜の夜や木より落ちたる白鼻心

東京都 奥村 和子

【評】霜夜のアマリの寒さに、樹上にいた白鼻心が落ちてきた。中国大陸南部に生息している動物であるといつので、たしかに寒さは弱そう。駄菓子屋の重きガラス戸一葉忌

川崎市 堀尾 笑王

枯芝を子らダンボール滑りかな

富山市 藤島 光一

クラークの指差す指に積もる雪

札幌市 藤林 正則

図書館の司書の小声なるも冬

南九州市 日笠こうじ

サイドミラー覗く鏡や何故そこに

鎌谷市 柿沼 好枝

ありがとう三毛猫いつか冬の星

ふじみ野市 原田 市男

猟犬のほうびにもらふ鹿の脚

大阪府 池田 寿夫

年間賞 短歌 ②

春色の服を掛ければ枝としてクローゼットに揺れるハンガー

松原市 たらりずむ

【評】見慣れたハンガーが、掛けられる服によって違って見える。まるで枯れ木に春の花が咲くように。思えば洋服というのは、顕著に季節を反映する。「枝」という楽しい見立てによって、クローゼットという空間が森に見えてくる。ありふれた日常を、想像力でハッピーにできるのも短歌の力だ。(依万智)

年間賞 短歌 ①

父の戦死にわが生涯は始まりて今朝のテレビに銃声を聞く

那須塩原市 野崎 征子

【評】やはり今回は、ウクライナ戦争を詠んだ歌から選びたいと思いましたが。その中でもこの一首は、ご自身の生そのものと遠国での戦いを重ね合わせた点が、読者に深い思いを促します。戦争とは戦地の人間のみならず、すべての人類にとって普遍的な悲しみ、苦しみであることを訴える一首です。(黒瀬珂瀾)



題字デザイン・イラスト 福田美蘭